

映像的形象コミュニケーションについての一考察

齋 藤 繁

要 旨

コミュニケーションの基礎にある個々人の意識、表象、心像表象、想像についての意味と、さらには社会・文化的シチュエーションにおける意思伝達にいたるまで、主として発生認識論的、認知心理学的視座からの論考を試み、特に哲学的認識論と認知心理学における現代的意義についても考察した

イメージ、コミュニケーションという帰化語は、今日的には、単に表象とか意思伝達という訳語でじゅうぶん説明が尽くされるものではないことが明らかとなった。言語学、心理言語学レベルにとどまらず、更にベースにある言語心理学、意味心理学、認知心理学、社会心理学、実験社会心理学サイドからの一層の分析が必要とされるであろう。また、伝統的なギリシア以来の哲学的認識論のさらなる論考の深化が期待される。

キーワード：

表象、知覚と表象、心像表象、視覚的形象、意識、想像と想像力、アイコンとシンボル、言語的・非言語的コミュニケーション、発生認識論、出生前記憶、周産期記憶、母子関係、エントレインメント、アタッチメント、胎生心理学、イメージの伝達、ヒエログリフ、ピクトグラム、形象コミュニケーション、テリトリイ、ことばの外延と言外の意味・含蓄、連想、連合群化、主観的体制化、象形文字、ワーキングメモリー、文化記号論、フォーマル・インフォーマルコミュニケーション

はじめに

コミュニケーションの問題は、信号の発信と受信のプロセスであると言え、端的な表現となり分かりやすいが、誰に何を何によって伝えようと

するのかと問われると、簡単には答えられなくなるであろう。コミュニケーション・ツールはさまざまである。

以前はコミュニケーションの訳語として「意思の伝達」が当てられていたが、最近では「意思の伝達」が用いられている。後者は意味・有意、考え、気持ち、意欲、意向、誠意、意志などの広義の思考活動一般が強調され、狭義には感覚的ではない抽象的な知覚能力、即ち「意識」を指示していると一応は考えられている。

伝達方法について言えば、感覚器を利用する、すなわち運動的・視覚的・聴覚的ツールに分類される。さらに言語的・非言語的伝達の方法が考えられる。いずれも表現と理解のための能力と方法が問われることになる。異言語、方言による場合、異文化交叉などの問題も浮上してくるであろう。生活空間と言語に関係するそれぞれに異なる語彙・語用と意味空間の問題は、言語的・非言語的伝達とテリトリイが関係するであろう。

さらに電子情報伝達となれば、I.T. リテラシー、情報コントロール、情報選択、虚偽・誤情報など多くの問題が山積する現状がある。本論は意思伝達の発生論的取組みからコミュニケーションの基底を成しているイメージ、想像の概念を明らかにし、言語的・非言語的意味伝達の現代的意義について考察を試みる。

1. イメージの誕生

最初にイメージという、すっかり日本語化してしまった外来語、つまり帰化語の解説から始めることにしたい。

Image という英語は、研究社の英和辞典を引いてみると、1) 像、肖像、画像、絵姿、彫像、2) 聖像、偶像、3) 形、姿、4) 生き写し、5) 象徴、化身、6) 像、映像、7) 心像、表

象、概念、8) 比喩的表現、形象、写像、イメージ、9) まぼろし、幻影などと多義的である。

また、新村出の広辞苑(岩波書店)のなかでは、1) 心のなかに思い浮かべる像、心象、2) 姿、形象、映像などを挙げている。関連してイメージ・アップは和製語だが、ほかにもイメージング、イメージ・トレーニングなどの帰化語が、昨今は日常的にひろく使われている。ちなみにイメージ管とはテレビの映像管のことである。

心理学的概念としては、心理学事典(平凡社)には、イメージという独立した項目はない。表象、心像などの項目に分散して記載されている。心理学は他の多くの研究分野同様、江戸時代の長きにわたる鎖国から開国へと、歴史的転換に伴う明治政府の欧化政策によって、欧米からわが国に輸入された学問なのであるが、イメージのような一語一義ではない多義的な語は、そのまま日本語に翻訳されにくいので、個別に扱われることになったと思われる。文部省・日本心理学会編「学術用語集・心理学編」(1986)(日本学術振興会刊)においても同然である。

イメージに関係するアイテムとしては、

- 1) 心像 mental imagery; imagery, image、
- 2) 表象 representation, Vorstellung、
- 3) 形態 configuration、
- 4) 映像的表象 iconic representation

などが見いだされる。

Websterの英英和辞典から imageの項目をみると、

- 1) a likeness or imitation of a person or thing. (人や物の類似物または模造品)
- 2) a picture of an object formed by a device (as a mirror or lens) (鏡やレンズなどの) しかけによって形づくられた物体の画像(映像)
- 3) a mental picture or conception
心的な画像または概念: IMPRESSION (印象)、IDEA (概念)
- 4) a person strikingly like another (ほかの人に著しく似ている人)

OXFORD現代英英辞典でもほぼウェブスターと類似した内容を読み取れるが、

さらにOxfordの5)をつけ加えてみると、

- 5) a word or phrase that describes sth in an imaginative way (想像上の語句)

となりイメージの内包がひろがるであろう。

いずれにしても英英和辞典やOxford現代英英辞典の説明では、その意味が具体から半具体、抽象レベルまで及ぶ意味水準が読み取れる。これでは一つの和語に集約して表現することには困難であろう。まさしくシンタクスとセマンテックスとの間の際だったディスクレパンシー(齟齬)を垣間見る思いがする事例である。

本論において、あえて形象の語を用いてタイトルとしたのは、必ずしも心理学用語のみによらないためである。形象は心理学的に、どちらかと言えば、映像的表象に近い概念のように思われる。

乾孝(1965)らは、「形象コミュニケーション」において、形象の意味を、視覚メディアとしての形象は「そのもの」「ありのまま」の事象再現ではなく、「信号」としてしている。

それは色、形、動きとして直接感覚を刺激する運動感覚性の信号であると同時に、言語系に対する信号としてはたらく。運動感覚系独自の拡張、かたどりの言語系へのつながりが、「意味」の記号としての刺激のはたらきと二重にはたらくと解すべきである、と述べている。

彼らにおいては、形象は単に網膜投映像の脳内におけるコピー印象ではなく、言語系と意味結合を果たす信号とみなされているのである。それ故に、かれらの形象の概念は、心理学における形態(Gestalt, configuration)の概念に近いということになる。

河合隼雄(1991)はイメージの特性として、

- 1) 自律性
- 2) 具象性
- 3) 集約性(多義性)
- 4) 直接性
- 5) 象徴性
- 6) 創造性

を挙げ、ユング心理学の本質はイメージの心理学であるとさえ言えるのではないかと示唆している。¹⁵⁾

15) 河合隼雄 イメージの心理学 青土社 1991

20世紀初頭に盛んに論議されていた哲学的認識論において、K. ヤスパーズ (K.Jaspers, 1948) は知覚と表象との相違を次のように指摘している。¹⁴⁾

- 1) 知覚は客観的で実質的であるが、表象は主観性を持ち、画像 (形象) 的である。
- 2) 知覚は定まった輪郭を持ち、安全であらゆる点でごく細部まで現れるが、表象は不定の輪郭を持ち、不完全で細部は部分的にしか現れない。
- 3) 知覚においては、個々の感覚要素は感性的新鮮さに充ちている。表象においては、個々の要素がその知覚要素に妥当していることも時にはある。しかし大部分の要素は妥当しない。多くの人びとは視覚的には、灰色にしか表象しない。
- 4) 知覚は恒常的で容易に同じ状態で固定される。表象は浮動し、溶け去る。だからいつも新たに産出されなければならない。
- 5) 知覚は決まった輪郭を持ち、完全であらゆる点でごく細部まで現れるが、表象は不定の輪郭を持ち、不完全で細部は部分的にしかわからない。
- 6) 知覚は意志に左右されない。任意に生じさせたり変化させたりもできない。そして受動性の感じをもって受け取られる。表象は意志に左右され、任意に生じさせたり変化させられる。そして能動性の感じをもって産出される。

こうした知覚と表象との差異に関するヤスパーズの主張に対しては異論もあり、心像と知覚像との関係についても様々に論議され、表象的体験と知覚的体験とは質的に異なることは無いとする見解もある。リンドウオルスキィ (Lindworsky, 1918) は、知覚と表象とはほとんど本質的な差異は認められず、多くの指標は知覚と表象の両現象に共通しており、それらはすべて知覚では強く表れ、表象では弱くあらわれてくるに過ぎないと主張した。¹⁸⁾

哲学における「認識」の問題は、古くてまた新

しい問題であるが、これは心理学においても同然で、特に心像表象の問題は最も古い問題であると同時にまた最も新しい世紀的な論題であるとも言えるかもしれない。近年の研究では自我における心像表象の問題が再浮上してきているのである。

北村晴朗 (1982) は、イメージをあえて心像表象と呼ぶ、としている。表象を広義でとらえて心像をそれに含ませる考え方で、同一表象体験が比較的持続的であり、印象 (impression) の濃いものを分類して心像としている。¹⁶⁾ 印象が比較的鮮明であるばかりではなく、時には、ある種の情動が裏打ちされた表象体験であるかもしれない。

人間の認識におけるイメージの起源をたどると、ロレンツ (K.Lorenz, 1952) の出生前聴覚的刻印づけ又は刷り込み (prenatal imprinting) の記述に突き当たる。¹⁹⁾

われわれは胎児期すでにさまざまな音響に対する聴覚反応をしており、聴覚的記憶によって、すなわち内語 (inner words) または内話 (inner speech) を保有して誕生してくるといわれている。それどころか、幼児期の間じゅう誕生時の視覚的記憶さえも持ち続けていると、近年のアメリカの医学心理学研究は明らかにしている。

これらの事実がより明確にされ、一般的に知れ渡るまでには、なお旬日を要すると思われるが、著者自身の観察調査によっても、このことは真実であるようにおもわれる。

視覚印象は、その都度厳密な客観的観察・記述が必要である。この点、超早期の周産期研究は他覚的な研究手段によらねばならず、直接の言語的内省報告が得られないため、ある程度の言語能力が育つまで待たなければならない。

そこで、われわれは運動と音声リズムの発達、旋律、和音の発達、それに日常的な音声言語 (話し言葉) の発達を通して、イメージの起源をさぐることにしたのである。

人間が人生において第一声を発するのは、この世に呱呱の声をあげた時の、あの産声である。しかし、それ以前すでに母胎内においてじゅうぶん

14) Jaspers K. Allgemeine Psychopathologie. 5Auffl. 1948.

18) Lindworsky J. Wahrnehmung und Vorstellung. Zeitschrift für Psychologie, 80, 201-225, 1918.

16) 北村晴朗 心像表象の心理 誠信書房 1982

19) Lorenz K. The Solomon's Ring. 1960

運動のリズム習慣を獲得し音響反応（音の聴取反応）を練習してきていると考えられる。生下時から直ちに運動と発声活動とが同期し始め、運動のリズムと音声リズムとは、独立的にか、同時的、あるいは交互に活動を開始しはじめる。

さらに母子間相互作用のなかで、見つめ合い、エントレインメント (entrainment) が音声と視覚反応の結合をつよめる。例えば母親が悲しい気分になれば胎児の運動は静止し、明るく喜びに満たされれば胎動は活性化する。それは静態的であるよりは動態的な相互作用であると言えよう。愛着 (attachment) が赤ちゃんに芽生え、母親の愛情は深まる一方である。こうして母子間相互作用は、親子の人間的な愛情形成を促していくであろう⁵⁾。

動物においてはエストロゲンの分泌が止まると、授乳哺育活動が終止する。動物のバイオ・メカニクスによる閉ざされた生体時計周期によるのは異なり、人間においてはより開かれた心理空間のなかで、無際限に育児活動が継続される。

新生児の認識活動に関与する諸要因は、外部環境刺激のほか、養育者による働きかけ、即ちあやし、うたいかけ、はなしかけなどが主要な支持要因として作用するであろう。わけても父母の在・不在による心理的影響は甚大なものがある。

胎児は母親の心配を感じ取ると胎内運動をしなくなる。胎児期の運動量の減少は発育不良を結果させるかもしれない。乳児にとって母親の不在は顔面体温の低下をもたらし、母親の出現は体温の急激な上昇を結果するという。

最近の臨床研究においては、コンピュータ断層撮影法 (CT: Computer Tomography)、MRI、fMRI などのハイテク科学観測ツールの開発利用によって、これまで知られなかった事実が次々と明らかにされつつある。

2. イメージの伝達

イマジュ (image) は、イマジナシオン (L'imagination)、即ち想像の力をかりて形態化され、変化させられる。²⁴⁾ リード (H.Read) は「イ

コンとアイデア」において、人間がかれのイメージの世界を創造し、それらを矯正し、幾年月、幾世紀のうちに、それらを変えてしまう。その目的を達成するために、かれは生命とともに与えられた偉大な装置や複雑な実験工場、かれの感官の実験工場や精神の実験工場を利用する。そしてそれらを通し、かれはかれのものであるこの世界に方向をあたえるため、イメージの形態で方法や手段を考案し結合して達成するのである、と語っている。

あるイメージはひろく多くの表象と関連付けられ、連想を呼び、それらは連合群化し、精緻化され、さまざまな表象の分布のうちから星座を構成し、やがていろいろなコード (code) を經由して、符号化 (コーディング, coding) が行われるが、その際、関係するのは表象型 (Imagery type) である。

さていまここで、貴方があるイメージをひとに伝えたいと考えているとしよう。富士山の美しさを、ぜひありのままに、あなたが感じたままを伝えたとしたら、さて、どうしたらよいだろうか。果たして、言葉でうまく言い表わせるだろうか。どんなにことばを尽してみても、たぶん百言を弄しても、富士山の美しさをことばで言い表わすことは、到底不可能であるにちがいない。案外言語以外の方法、つまり写真とかビデオ、絵画、映画・テレビなどの方が、リアルに、しかも楽々と多くを伝えることができるかもしれないのである。

われわれの社会的コミュニケーションにおいて、多くの場合、様々な経験や体験の表象は、たいていは言語に翻訳され、記憶ストアに貯蔵され、保持される。もちろん純粋に運動的、絵画的、音楽的バージョンとしても貯蔵されることは言うまでもない。あらゆる情報は、一定の準拠枠、即ち概念的枠組みに編入され、階層組織を成して、記憶ストアに収蔵される。代表的記号である図形記号と言語記号とは、それぞれ視覚的コードと言語的コードの二重コードに対応する。言語コードは多くの場合聴覚的映像によるが、文字で

5) Bowlby J. The Making & Affectional Bonds. 1979

24) Piaget J. Six etudes de psychologie Gonthier, 1964.

あれば視覚表象と意味的表象を伴って二重コード化される。

写真のような視覚的コードもまた音声語を伴えば、同様に二重コード化されることになる。たとえば親しい人の写真 (Picture) は、その面影と名前 (naming) とが懐かしい思い出をともなうて心像表象として同期し、個人において認識されるであろう。

視覚映像の表象はそれぞれの共通属性を抽象し、群化してクラスター (cluster) を形づくり、一つのプロトタイプ (prototype) を形成する。相互に関係づけられた文を形成すると、各文素は階層構造をもつさまざまな知識の集合体として、スキーマ (図式、scheme, schemata) の変数として位置づけられる。

スキーマとはさまざまな知識に照らして、それぞれの情報の意味を解釈し、またそれに適合するように再構成するプロセスを言うのである。さらに敷衍するなら触覚的、運動的イメージも同様にコード化される。それぞれのイメージは、連想 (association)、般化 (generalization) 作用によってハイエラキー又はヒーラルキー (hierarchy) を形成する。

記号成分と単なる装飾文・絵柄との区別は、視覚リテラシーと記号言語リテラシーとの関連付けをすることによって成しえるかもしれない。そのような試みの一つが、絵から記号への移行プロセス、あるいは地域をこえた共通性と一般性の検証である。人は認知的スクリプト (script) を、個人的な経験を通して学習していると考えられる。スクリプトとは人が期待する一連の事象の整合性を意味し、出来事の因果連鎖 (causal chain) を想定する枠組みなのである。

視覚映像の情報が連鎖的出来事の継起として、言語的スクリプトのなかに組み込まれて来れば、なんらかのメッセージの伝達が行われる。すなわち直接的直観的になされる視覚コミュニケーションは、論理回路にとってかえられ、そこに論理的認識を生み出す。慣習的行動が無批判的に起こりやすいのは、認知スクリプトの利用によるものである。

このように記号論的な視点から物語スキーマの展開構造の解析を試みるとすれば、静的なス

キーマやスクリプトを、力動的な MOPs (Memory Organization Parckets) 構造モデルに関係づけてみることもできる。

文解析のアルゴリズム的モデル ATN (拡張遷移網、Augmented Transition Network) モデルを援用できれば記号の統語処理と意味処理の統合が可能になる。

索引信号または自然信号が絵画化され、象形文字のようなコピー信号あるいは形象記号が産出される場合、原義を失わない範囲で、単一の信号の形態的変容すなわち略画化が起こり得る。多くの場合線描画か輪郭線画の形態に簡略化される。エジプトのヒエログリフがその例である。そしてこれらは地域性をこえて共通した形態となる。従って、ある地域が共通的な文化的伝播圏内であれば類似性が見られるのは当然である。

図形語または絵記号 (Pictograph) の産出には、絵から象形文字への変換操作が必要とされる。もちろん記号一意味関係の明証性があり、老若男女すべての人々に同一の心的イメージを生じさせなければ、普遍妥当する一般記号とは言いがたい。

記号はその対象関連において、アイコン、インデックス、シンボルに三分される。対象の写像又は模倣によって指示された記号がアイコン (類像) である。かかるアイコン的記号としての図形又は絵文字の一般的意味が明らかにされた段階で、さらに特殊的語用についても言及していけるはずである。

同一対象の視覚的イメージは、共感、感情移入、それに時間的経過、異なった経験の積み重ねにともない、意味的变化を生じることがあり、対象の認知における見かけの、或いはみえのイメージの変容が、物理的回転によって、あるもの見かけが逐一変化していくように、心的回転によっても起こり得る。このような心的回転能力は、図形や言語の構成と密接に関係する知的能力である。イメージの変容の生起には知覚的飽和が関係していることもある。

幼児が逆さまの馬を見せられても、すぐに馬だと分かるのは、この心的回転によっているからである。基線上の事物は中心点と対称な鏡映像としてシンメトリーを形成するが、これは二次元的には成立しやすく、三次元的には困難である。

その理由としては、鏡映像としては物理的にそうであるように、心的イメージにおいても容易に重ね合わせることができないからである。このことは、なぜ先史時代の縄文土器や土偶の施文がシンメトリックな二次元的空間表現をとっているのかという問いへの答えになると思われる。その上、シンメトリーはわれわれに心的平衡と安定感をもたらすとも言える。³⁵⁾

3. 心像と想像

想像 (imagination, Einbildung) は、過去経験より得られた心像を再構成して新しい心像パターンをつくることである。想像力は思想を持たない。それゆえ想像力の効果には思想で勝つことはできないのである。

創造的で構成的な想像とは、社会的に制限された、通俗的な意味しか持たない言語概念などによる構えからではなく、もっと自由に心像を駆使して、新しい着想を生み出すところの、すなわち創造的思考を意味する。たとえばいうなら、石庭の枯山水は楽園をつくりだすのである。J. ピアジェ (J. Piaget) は表象 (representation) を広義に「思考」と同義なものとして考え、狭義には精神的な心像、あるいは「記憶心像」に限定した。²³⁾ 前者を「概念的表象」と呼び、後者は「象徴的表象」、あるいは「心像的表象」とよばれるが、単に「象徴」、「心像」とされることもある。対象によって限定的な意味づけをすることにとどまらず、イメージの再生産のころみ、無限定な意味空間にいたるまで、自由に繰り広げられる心像的表象の世界が、想像という言葉の意味である。

想像は広義にはある種の思考活動であるとされる。C.G. ユング (C.G. Jung) は神話学的象徴主義の立場において、人間の心の奥底に集合的無意識 (Collective unconscious) を仮定し、現代人のころの中にも、古代神話にみられるような人間の心

の元型 (Archetype) が息づいていると比喻する。ペルソナ、アニマ、アヌムス、影、グレート・マザー、老賢者、セルフ (Self) などが、いずれも元型的な象徴的意味をもつ。それぞれのモチーフに応じてイメージを生み出す人類共通の力の源泉が元型である。⁹⁾

ユングは幻覚、妄想、狂気のなかにも、健常者が想像の世界で見かけるような共通した象徴的イメージが存在する、と考えている。想像力は、たとえば言えば、心像に羽を取り付け、大空を飛翔し、大海を遊泳するようにさせる力である。¹⁰⁾

夢と夢想とは人々をして日常性からの脱出を可能にするかたわら、夢の幻想的創造が時として運命の予告のように感じ取られることもあるかもしれない。現代文明の醸し出す幻想の明暗が、かえってわれわれの庶民的な日常性の安穩を脅かす結果にみちびくことがある。パスカルは「想像力は誤謬のあるじ」と断じている。

このように想像力が見えもしないものを見えるかのように思いこませるものならば、それは、アラン (ペンネーム Alain, 本名 Emile Auguste Chartier) が以前に指摘したように、単に主として精神のもつ静観的な力などではなく、身体の混乱と同時に精神のなかへ入ってくる誤謬と無秩序のことを言うのである。²⁾ その原因らしい思い込みの対象の心像は、まったく無限定な、いまにも消え失せそうなものであることが多い。つまりそうした心像は注意力の働きで解消されるが、いわばわれわれの背後でまた形づくられるのである。換言すれば、想像力はそれ自身の性質についても、われわれを欺くものだということを認めておくことである。

意想奔逸という言葉は、想像を巡らすときのあんな様相を示している。それがたまたま一つの方向性を帯びて、創造性と結びつけば、そこに新たな心像的表象の世界が開けてくるのである。

パスカルやアランの指摘は、想像性の持つネガ

35) 齋藤 繁 心理考古学序説—縄文土偶の造形心理学の一考察—弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第20号 (通巻31号) 1994

23) Piaget J. L'image mentale chez l'enfant. 1966.

9) 林 道義 ユング思想の真髓 朝日新聞社 1998

10) 平田武靖 無意識と象徴 - フロイトとユング - 現代思想 第7巻第5号青土社 1979

2) Alain DÉFINITIONS. Gallinard Paris, 1953.

テブなアスペクトを強調しているようにも思われる。想像が波間に浮かぶ泡沫なのか、それとも運命の予告というシリアスな側面までを内包するものなのかは、まさしく個々人の想像に任せるほかはないと思うばかりである。

4. 形象コミュニケーション

先述したように、形象は環境世界における、単なる対象の網膜像の再現ではなく、対象についての知覚のゲスタルトないし形態 (Gestalt, configuration) の再生又は再構成である、といえる。

絵画的表現において、画家はどんな場合でも自己の心象風景を描こうとする。たとえば風景画の鑑賞者たちは、その絵の中から何かを観取し、原風景に思いを馳せる。表現者の個性と鑑賞者の個性とが聞き合うことになる。もともと意思伝達 (communication) にかかわる語源は、ラテン語の *communis* (共通な)、*communicatus* (他人と分かち合う) である。会話における話し手と聞き手の関係と同様に、絵画、音楽、舞踏のような芸術的表現の場合にも、何か共通の事象が触れ合い、伝えられることを意味している。

絵画的表現をとまなう視覚的コミュニケーションは、主として線形、色彩を用いることによってなされる。ジャンヌ・ベルニは、絵画は写しにすぎぬものであってはならない。たとえば肖像画にあっては、芸術家は色と光との戯れによって、一つの魂の調子を表現し得る。一個の存在が一定の瞬間に要約している心理的生成の全体が、ただ一つの眼差しや微笑の性質のうちに具体化される。ついに実現されなかった憧れとともに、いくた過去の事件やその反映が具体化されるのであるとしている。

印象派以降の抽象的象徴主義の絵画にみられる光と色、色と色との調和の重視、そして色と人間の心的状態との合致が、創作のモチーフをなしている。外界と感性とのあいだのなごやかな平衡を表現する黄色、生命の強壯さを刺激する赤のような、生き生きとした色があり、安らかさを与える緑がある。

画家は物体の意味を解釈するために、その物体

の本質的な線を凝集しようとし、また視覚的可塑的な世界にかえるのに幾何学的形象の世界を再構成しようとする。

具象主義の絵画は、現実を詩的に感知し、写実的な表現を試みるが、具象を放棄したシュール・リアリズムの画家たちは、太古的精神世界へと向かい、人間の内奥に潜む精神の元型を探り当てようとしてさまよう。超現実主義は人間が行き着くはずの遠い未来を目指しながらも、現実には超古代精神との無意識的融合を果たそうとしているのだ。J. L. ヘンダーソンは、「人間と象徴—無意識の世界—」において、原始的感覚と衝動とは、現代人の無意識の深層にも息づいていると述べている。

視覚メディアについて、グラフや図解が誰にでも同じように「わかる」なんて言うことは無く、また瞬間をとらえた写真や写実的と言われる油彩などが、「そのままの再現」であるとするのも誤解であるということであろうか。その点、音声や文字による言語メディアになると、一定の時間的序列にしたがって伝達され、個々の具体的経験をおおきく包む概念作用によって伝えあいが行われる。絵画的伝え合いは空間的であって、こうした時間系列を必要としない。視覚メディアと言語メディアとの中間に位置していて、それに最も近い形のメディアが図表とかグラフであろう。

5. テリトリイと 言語的コミュニケーション行動

元来人間は群れをつくって暮らしてきたが、その居住空間はどんな場合でも、個々人にとってはある特性を有していた。それが縄張り (territory) 或いは個人空間 (personal space) の存在である。縄張りとは一人ひとりが占有していると考えられる空間のことである。それは地理学的、物理学的だけに計量・規定されるものではなく、心理学的な生活行動空間 (LSp; Life Space) を意味している。

したがってこの縄張り他人が眼で見えることはできない。本人自身ははっきりと自覚的に意識し、物理学的、地理学的にも明瞭に計量できる空間である。動物行動学の知識からはごく常識的

な事実だが、人間行動学が盛んになるにつれて、パーソナル・スペース、つまり人が何時も身の回りに持ち歩いている筈の、暗黙の裡に携帯している縄張り、言うなればポータブル・テリトリー (portable territory) の存在が仮定される。

動物にとってテリトリーを防衛することは命がけの仕事である。かれらが日常的に行なっているマーキングは、自己の縄張りを他の動物に知らせるサインの役割をしている。縄張りへの侵入はタヴァーである。

人間の場合は牧場の柵や住居の塀のように、はっきりした境界を示すものもあるが、文化会館や公民館のような公共の集会場、公園のベンチ、公衆トイレ、それに祭りの見物席、湘南海岸のようなサーフィンや海水浴場の砂浜などでは、明確な相互のなわばり主張が観察されることがある。

個人が主観的に設定しているテリトリーに他者が侵入してくると、明らかに不快感を持つであろう。まず手の届く距離を保つこと ("to keep at arms length") が基本ラインである。若い娘さんのように警戒心が強いのか、個人的に知覚されるおそれの強いほど、すなわち場所や人への不安や恐怖がつよくなるにつれて、この縄張り距離と範囲は拡大する傾向がある。

ホロビッツ (M.J.Horowitz,1964) らの身体緩衝地帯 (Body-buffer zone) の考え方は、自我は自己の身体や内部世界の出来事と同様に、外部環境事象である非物質的な空間にまで及ぶこと、自我概念が近接して存在する人々とかれらへの態度から成り立っていることなどが考えられ、したがって身体緩衝地帯の大きさ、形、侵入しやすさは、そのひとの現在の自我の状況と動機づけの状況、そして対人的な相互作用によって変化するとしている。これはほとんどパーソナル・スペースの概念に近い。

これまでの公共の広場、会社・オフィスにおける個人的空間の研究にととまらず、統合失調症の患者の臨床経験や病院看護者と患者との暗黙の感情交流などの非言語的コミュニケーションを重視するプロンディスとジャックソン (M.N.Blondis

& B.E.Jackson,1982) の主張するところからも、パーソナル・スペース研究の必要は広がってきていると考えられる。⁴⁾

さて、個人の縄張りも大勢の同族集団にとって代えられると、つまり、集団の中のみ込まれ、縄張りを共有することになると、実質的になわばりは何倍にも拡大されたことになり、ムレの中にいるうちは、独りで居るよりも数等倍の安心感が得られる。

人類はこの社会集団の利権にかかわる縄張りの防衛あるいは拡大を意図し、時として大戦争という救いがたい悪事を惹き起こしているが、なんとしても「寄らば大樹の陰」であろう。そのためにいろいろな条約、同盟が結ばれたが、これがまた二度にわたる世界大戦の原因にもなっている。

さて、動物実験のデータは狭い居住空間が発育を抑え、最悪のケースでは共食いまで起こすことを報じている。

一般的に言って、このような個人空間が異方性を持つことは、聴空間の異方性との関連からも予測できる。前方はよく見えているし、音源にも気づきやすい。しかし、背後となると対象は視野外にあり、音の定位もしにくいので、危険から身を守るという動物的な防衛本能をかきたてずにはおかない。

「片隅の魅力」はパーソナル・スペースを容易に作り出せ、なおかつ速やかな逃避・避難行動を可能にする。壁を背にするのはトロピズム (趨向性) のせいばかりではないのかもしれない。

あるアメリカの研究者が、「道に迷って困っています。電話を貸してくれませんか。」という申し出を受けた場合、あなたはドアを開けて家の中へその人を入れますか、という問いかけをしながら戸別訪問をした調査結果を報告した。これは携帯電話などは無かったすこし以前の話であるが、ニューヨーク市では、訪問者が男性の時12%、女性であれば40%の人が受け入れた。しかし、だいたい離れた地方都市の場合、相手が男性の時40%、女性では100%であったという。訪問者は中年の普通の服装をしたひとであったが、もしこ

4) Blondis M.N.& Jackson B.E. Nonverbal Communication with Patients: Back to the Human Touch John Wiley & Sons, 1982.

れがよぼよぼの風采のあがらない高齢者か、はたまた屈強の面構えをした人物であったり、あるいは若いブロンドの美人であれば、もうすこし数値も変わったことであろうと推測される。

「スープの冷めない距離」(The distance to keep soup hot.) という有名なフレーズがある。英国のシェルドン (J.H.Sheldon) が1948年に、別々に住む老いた親とその子との間の親密さを保ち、簡単に支援することのできる距離の目安として、この言葉を用いたとされている。

事故、災害、戦争や犯罪の被害者への支援、末期患者のターミナル・ケアのような危機管理、危機的状況における支援活動は、有無を言わせない迅速な支援行動が何よりも優先する。何時でも、どこへでも出向き、誰に対しても温かい無言の支援がものを云うであろう。ここでは物資や空間を共有し非言語的コミュニケーションが有効にはたらくであろう。

「百聞は一見に如かず」という諺があるが、災害時においては、暫時飲み水や一個のおにぎりの方が百言に勝るかもしれない。しかし人々の悲嘆、トラウマはそれだけでは癒されない。やがてことばが主役になることは自明の理である。

国際貢献はテリトリイを共有することから始まる。相互理解から相互協力が生まれる。急場をしのぎ、用が済んだら出ていけでは、体よく相手を道具として利用したに過ぎなく、相手の善意をないがしろにすることにもなり、こうした信頼の欠如した状態は、これまた新たな騒乱の火種になるであろう。われわれは互いに母国語を至上とする存在であり続ける以上、一層相互の国語の学習が必要とされるのである。

権力主義、エリート主義、商業主義などから派生する独善的な支配願望は縄張りの拡大を画策するが、20世紀に蔓延した植民地支配の幻想は資源争奪戦争の様相を呈し、人類に真のヒューマンイズムの精神に反する深刻な結果を齎した故に、現代はいっそうの相互理解と国際交流が求められているのであって、現代において、言語をツールとする意思伝達はグローバルな文化学習と文化交流を推進するであろう。

6. 視覚形象の記号化

現代人であるわれわれは、自己の経験や知識をひとに伝えたいと思えば、さまざまなツールを利用して即座に実行可能である。

また、たとえば図や表の読みをしようと思えば、一定の規則つまり縦横、左右の位置・方向についてと、長短、高低、広狭、多少、軽重などの基本概念を持っていれば、話し、文章などの説明無しでも可能である。一目瞭然であること、説明を要さないこと、多少とも付箋付け程度で結果が判明することが要点であり、それでひとびとは即座的に図表を理解することが出来るのである。人類の記号表現と理解の歴史は、おそらく旧石器時代まで遡らなければならないだろう。日本の縄文時代は無文字であるとされているが、ピクトグラムめいたものは土器・土偶に刻印されているのである。絵文字や原始絵画の世界はまさしく視覚形象探索の宝庫といえるかもしれない。

さて、スペインのアルタミーラや南フランス、ドルドーニュ地方ラスコーの洞窟の粘土質の壁絵は、多くは狩猟の光景が描かれている。バイソン(野牛)のほかさまざまな動物の群像が見られる。今から1万7千年前の旧石器時代クロマニオンたちの造形である。わが国では青森県の縄文時代前期の地層から出土した礫に鳥獣画が1例発見されている。中期に入ると東日本一帯に出土し、弥生時代に至ると全国的にみられるようになる。共通しているのはいずれもごく単純な輪郭線によって描かれている点である。

原始絵画の特徴は、多くは稚拙な輪郭線表現と自然色(たとえば貝の白色、べんがらの赤色、藍色、黄色など)で構成されていることである。これらのものが、単に狩猟の成果を記録したいわば収穫の記録なのか、あるいは呪術的目的で祭壇のある神聖な場所に描かれたものなのかはよくわからないが、何らかのメッセージの伝達を意図したことだけは肯定されてよいだろう。

無文字時代の人類のコミュニケーションの手段が、輪郭線画であったことに興味もたれる。3千5百年前の中国で、亀の甲羅か牛の骨などの獣骨に刻印された亀甲獣骨文または甲骨文の例をみると、よく知られている棍棒文字の起源と変容

に類似する変容のプロセスが認められる。

たとえば、本とか母の漢字についてみてみよう。「本」は樹木の樹幹、枝葉、根の輪郭をかたどったものである。「母」は女性の乳房をそのままあらわしている。もし中央の2つの点をタテ線に替えてみると、まったく違った文字となる。母(ナカレ)である。

はじめはかなり写実的な全体像輪郭線画であったものが、段階的に簡素化と単純化がおり、最後に象徴的にある部分だけを強調したりするようになった。最終的に部分的強調が文字記号として定着したのである。

文字の起源をたずねると、つぎつぎと興味深い出来事に遭遇する。文字史はそのまま人類の認識発達の歴史なのである。誰が見ても同じ認識が得られる共通な視覚的記号の案出、これが文字史の歴史的課題であった。漢字の歴史は象形文字からはじまり、それぞれの特性に応じて指示、会意、形声、仮借、転注文字へと推移した。象形文字は形からそのものの特徴を表わした、事物を指示する表意文字であるが、組み合わせられると会意文字となり、より複雑な意味を表わすようになる。形成文字は音のみをあらわす表音(音標)文字である。アルファベットは表音文字で、それ自身意味を持たない。単語として組み合わせられて意味を表わすようになる。

単純な形象や単一の色彩が、それぞれ象徴的意味をもっていることは言うまでもないが、共通な面と相違する点がままたることに注意したい。連想過程における部分・全体、属・種、同一・反対、印象、類似、共在連想などのような語連想が、ある一つの刺激を手掛かりとして連鎖的に生じる可能性もある。これが語連想におけるクラスターのはたらきである。連想が個人内において主体的に生起する場合は主観的体制化と呼ばれられる。主観的体制化は知的障害児においても観察できるので、これは一般的な連合作用と言えるかもしれない。

さらに言語情報伝達の場合、ことばの外延(denotation)と言外の意味、含蓄(connotation)が全体的な文脈の理解を違ったものにするかもしれない。これは所謂本音と建前にも関係するかもしれない。言語的コミュニケーションにおいては

状況的認知が絶えず背景要因として働いていることを閑却できない。

1字連想や1語文の事例のように、ほんのちょっとした手懸りについての連合作用のプロセスとその精緻化は、より以上の豊富な視覚形象を産出するばかりではなく、象徴的表現となり、それはやがて物語へと発展していった、いろいろなエピソードにも結びついていく。エピソード記憶は、やがてワーキング・メモリーとして長期にわたって保持され、大脳のメモリストアに貯蔵されるようになる。

むすび

言語的・非言語的コミュニケーションは、心理力動的ないし社会力学的問題であると考えられる。換言すれば人と人との相互的作用、関係の力学の問題であるとも言える。性別・年齢差のようなゼネレーションギャップ、地域差、所属する集団と集団への帰属性、血縁集団と家族のシンタリティなどなどさまざまな個人的、文化・社会的構成因子など、コミュニケーション行動を基礎づけている基盤的因子や背景因子の考慮を欠くことはできない。さらに時間因子の検索には継起的、歴史的な分析と考察が求められている。

母子間のコミュニケーションにおいては、非言語的な表現であるゼスチャー、パントマイムが有効である。しかし、まったく理解できない母親の話しことばは、新生児によって学習され、次第に意思表現のツールとして役立つようになる。

同様に、異なる言語文化圏における意思伝達は、最初から無理なことは自明である。

言語発達の時系列を検索してみても、話し言葉の場合、最初から比較すること自体が無理なのである。調べる程に相違が明瞭になるだけである。互いに再学習して、共通な土俵の上でパフォーマンスする他はない。

異なる風土での文化・社会的言語生成の歴史は、地域の生活習慣や習俗・慣習といった風習を土壌としている。言語表現において表層的な類似が見られても、イメージにおいてまで同一であると言う保証はどこにもない。比較文化的研究の準拠枠がどんなものであるかを前提にして、それぞれ

れのアイテムに対するイメージの相違を比較すべきである。

言語の理解と表現における相互主観性を専一明らかにしない限り、相互認識の客観的理解は到底得られまい。

イメージには浅深、濃淡、主観・客観、浮動、正誤などさまざまな不安定要素が混在している。何処までが妥当・適切なイメージであるかについての信憑性は、いつも藪の中であるか、波間に浮かぶ泡沫に等しいものなのかもしれない。知覚のゲシュタルトに関する相互の高度な主観の一致が、われわれに相互の共通の認識を生みだすとおもわれる。

個人主観を極力排して、他者との共通の認識に至るルートの探索と、絶えざる他者理解の努力が求められる。他者の認識は自己理解の道を拓き、自己認識をいっそう深めてくれる。そのことが認識における高度な客観性を生じる源泉になると考えられる。

コミュニケーションを単純に感情と意志の伝達であるとか、情報の発信と受信のプロセスであると言っても、それだけで説明が尽されないことは明らかである。視覚的形象コミュニケーションはイメージの伝達に関係している。イメージという帰化語自体は多義的であるが、ここでは心像(mental imagery)を指示している。

日本語としてのイメージの語用に関しては、多義的内包を持つ包括的表現としてか、あるいは特定の意味をこめて表現していることが考えられる。

イメージ・コミュニケーションにおいては、視覚映像的表象、形象的表象に基づいて言語的伝達がなされるとしても、多くの場合言外の意味が捨象されてしまいかねない。情報の受け手がつねに語の言外の意味、ニュアンスを感じ取るかどうかは保証の限りではない。

次第に高度化する言語能力の発達は大人をモデルとして学習によって達成される。言語的コミュニケーションにおいては、言語学習の基礎となるシンタクスとセマンテックスの文化的学習の差異によって、個人の知識や経験とか記号・言語などの理解や表現力が関係するであろう。

言語を媒介とするコミュニケーションには、と

もすれば惑いと迷妄があるかもしれない。自他ともに真意のほどは不明なままに、表層的言語的關係枠の中で機能する言語活動であるとも言え、また往々にして言行不一致ということもある。

しかし、日常生活でのごく親しい気のおけないどうしのコミュニケーションとなると、世間話とか雑談を通じて知識・情報だけでなく、世間知、人間知までが磨かれる。COMSAT (Communication Satellite) と言えば通信衛星のことだが、今日ではこれで瞬時に世界中の出来事を知ることができる。

インターネット通信の信号理解は、端的に言って辞典的言語理解にとどまり、コノテーション、非言語的表現のニュアンスは捨象されてしまい、言語情報伝達における情感の表現は粗方欠如しているかもしれない。字面だけの電文調の事務的な内容の伝達にとどまるか、ないしは定型文か誇張された表現が横行することになり、発信者の姿は隠匿されてしまいかねない。

肉声を伴う携帯電話かスマホの場合は、最大限に装われた言語表現の背景を成す顔の表情、所作・振る舞いの認知、醸し出す雰囲気などの状況的な感知、そのほか時系列的要因などを欠いていることも考えられる。

れわれの日常生活におけるコミュニケーションには、なんと言っても、常識的で共通理解が可能なレベルの表現が求められるが、その言語的コミュニケーションを支えている非言語的表現の数々を考慮に入れなければ、トータルな意思伝達のまったき理解には到達することは叶わない。

仮にある要請に対しては、心からの賛意をもってする事があれば、また心ならずも不承不承の肯定的承認をすることもある。いやいやながらの賛同もあるだろう。世間胸算用ということもある。

分かったようでよくわからない、理解不十分なままに応答を求められた時には答えに窮し、つい曖昧な応答に終始することにもなる。それにしても口頭発言とは裏腹な内心の拒否、すなわち権力的支配と服従の関係においては面従不服がある。心ならずもイエスと言ってしまふかもしれない。

あいまいな判断と混迷する心情などの個人的な思いがあれば、なおさらである。いろいろなコミュニケーション・ツールを利用するにしても、

あらかじめ意思伝達における背後事情をじゅうぶん考慮に入れておくことが要訣であろう。

参考文献

1. Alain Propos sur le bonheur: Folio Essais. 1928. (石川湧訳 幸福論 白水社 2011)
2. Alain Definitions. Gallimard, Paris, 1953. (森有正訳・所雄章編 定義集 みすず書房 1988.)
3. Arnheim R. Visual Thinking. University of California Press, 1969. (関計夫訳 視覚的思考 美術出版社 1974)
4. Blonds M.N & Jackson B.E. Nonverbal Communication with Patients: Back to the Human Touch John Wiley & Sons 1982. (仁木久恵、岩本幸弓訳 患者との非言語的コミュニケーションー人間的ふれあいを求めてー医学書院 1979)
5. Bowlby J. The Making & Affectional bonds. 1979. (作田勉訳 母子関係入門 星和書店 1981)
6. Bruner J.S., Oliver R. & Greenfield P.M. Studies in Cognitive Growth. John Wiley & Sons 1966 (岡本夏木他訳 認識能力の成長 明治図書 1970)
7. 大坊郁夫・竹村和久編 社会心理学研究の新展開 第2章 北大路書房 2014
8. 林進編 コミュニケーション論 有斐閣 1988
9. 林道義 ユング思想の真髄 朝日新聞社 1998
10. 平田武靖 無意識と象徴ーフロイトとユングー現代思想・総特集ユング 第7巻 第5号 青土社 1979
11. 深田博巳編 コミュニケーション心理学 北大路書房 1999
12. 福原省三 アイ・コンタクトと印象の評価が受け手の対人感情に及ぼす効果心理学研究、61、177-183、1990
13. Foucault M. Archeologie du savoir. Editions Gallimard, Paris, 1969. (中村雄二郎訳 知の考古学 河出書房新書 1981)
14. Jaspers K. Allgemeine Psychopathologie. 5 Auf. 1948.. (内村裕之他訳 精神病理学総論上巻 岩波書店 1953)
15. 河合隼雄 イメージの心理学 青土社 1991
16. 北村晴朗 心像表象の心理 誠信書房 1982
17. 北村晴朗 新版 自我の心理 誠信書房 1977
18. Lindworsky J. Wahrnehmung und Vorstellung. Zeitschrift für Psychologie 80, 201-225, 1918.
19. Lorenz K. The King Solomon's Ring. 1960 (日高敏隆訳 ソロモンの指輪 早川書房 1981)
20. Majorie Fink Vargas Louder Than Words An Introduction to Nonverbal Communication 1987. (石丸正訳 非言語的コミュニケーション 新潮社 1987)
21. 大山正・梅本堯夫編 特集イメージ 心理学評論 第24巻 1-135 1981
22. 大脇義一 表象の心理学 東苑書房 1937
23. Piaget J. L'image mentale chez l'enfant. 1966 (久米・岸田訳 心像の発達心理学 国土社 1975)
24. Piaget J. Six etudes de psychologie Gonthier, 1964. (滝沢武久訳 思考の心理学ー発達心理学の6研究ー みすず書房 1968.)
25. Raffle-Engel(ed.) Aspects of Nonverbal Communication. Swets and Zeitlinger B.V., 1980 (本名信行他編訳 ノンバーバルコミュニケーションーことばによらない伝達ー大修館書店 1981)
26. Richardson A. Mental Imagery. Routledge & Kagan Paul Ltd. 1969. (鬼沢貞・滝浦静雄訳 心像 紀伊國屋書店 1973)
27. 齋藤 繁 言語教材としての古代文字の利用について 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第9号 (通巻20号) 1989
28. 齋藤繁・西沢勝則・木村美津子 PSL-88による重度精神発達遅滞児の絵記号学習 弘前大学教育学部紀要 第63号 1990
29. 齋藤 繁 遮光器土偶のシンボリズムー認知心理学的一考察ー弘前大学教育学部紀要 第64号 1990
30. 齋藤 繁 古鏡文様の文化記号論 弘前大学教育学部紀要 第66号 1991
31. 齋藤 繁 直弧文の文化記号論 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第14号 1991
32. 齋藤 繁 PSL-88 による絵記号文の学習について 弘前大学教育学部紀要 第67号 1992
33. 齋藤 繁 ベルソナと縄文のエスプリー縄文晩期土面についての一考察ー 弘前大学教育学部紀要 第68号 1992
34. 齋藤 繁 縄文絵画の文化記号論 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第15号 (通巻26号) 1992
35. 齋藤 繁 心理考古学序説ー縄文土偶の造形心理学的一考察ー 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第20号 (通巻31号) 1994
36. 齋藤 繁 心理考古学序説・補遺 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 第25号 (通巻36号) 1997
37. 齋藤 繁 知的障害児(者)の言語的 コミュニケーション障害支援方策について 弘前学院大学社会福祉教育研究所年報 第2号 1-7頁 2005
38. 齋藤 繁 危機介入におけるコミュニケーション 弘前学院大学社会福祉学部紀要 第9号 2009
39. 末田清子・福田浩子 コミュニケーション学ーその展望と視点ー 松柏社 2003
40. 土田昭司編 対人行動の社会心理学 21世紀の社会心理学 1 北大路書房 2001
41. 植村勝彦他 コミュニケーション学入門 ナカニシヤ出版 2000